No.104 2012・7・10

ISHIKAWA-KEN HISTORY MUSEUM
発行 石川県立歴史博物館
〒920-0963 金沢市出羽町3番1号
TEL.076(262)3236 FAX.076(262)1836
http://www.pref.ishikawa.jp/muse/rekihaku/

れきはく

ISHIKAWA-KEN HISTORY MUSEUM

五護陀羅尼マンダラ　国立民族学博物館所蔵

夏季特別展

マンダラ

—チベット・ネパールの仏たち—

◇会　　期　7月14日(土)～9月2日(日)
会期中無休
◇会　　場　第1特別展示室
◇開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
◇入 館 料　一　般　750円（600円）
大学生　600円（480円）
高校生以下無料／65歳以上600円
（　）内は20名以上の団体料金
◇主　　催　石川県立歴史博物館　国立民族学博物館
財団法人千里文化財団
◇後　　援　北國新聞社　NHK金沢放送局　北陸放送
石川テレビ放送　テレビ金沢　北陸朝日放送
金沢ケーブルテレビネット　エフエム石川
ラジオかなざわ　ラジオこまつ　ラジオななお

◆講演会 ＜会場は当館学習ホール・聴講無料＞

「般若心経」と色即是空
日　時　7月14日（土）午後1時30分～3時
講　師　立川 武蔵　国立民族学博物館名誉教授
主　催　国立民族学博物館友の会
石川県立歴史博物館

日本の曼荼羅文化
日　時　7月28日（土）午後1時30分～3時
講　師　頼富 本宏　種智院大学名誉教授
※展示室をあわせてご覧の際は入館料が必要です。
事前申込は不要です。

◆列品解説 ＜要入館料＞

日　時　8月4日（土）午後1時30分～2時30分
講　師　森 雅秀　金沢大学教授

併設企画展　北陸の曼荼羅

石川・富山を中心に、北陸に残る曼荼羅の名品を紹介。
会　期　7月14日（土）～9月2日（日）
会　場　第2特別展示室

列品解説 ＜要入館料＞
日　時　8月11日（土）午後1時30分～2時30分
講　師　北 春千代　当館学芸主幹

夏季特別展

マンダラ

―チベット・ネパールの仏たち―

はじめに

マンダラ（曼荼羅）を仏教美術として楽しんでいても、その図像や宗教的な表現の意味するところを詳しく知る人は少ないでしょう。そもそもマンダラは、仏門に入る際の儀式や悟りを求めて行う修行に使われるもので、彫像や絵画によって立体的、視覚的に表現されたものです。これらにより、神々や仏たちと、その宮殿や世界の中心にそびえ立つスメール山（須弥山）が表現されており、いわば、世界や宇宙の縮図なのです。

本展覧会では、インドやチベット・ネパールの神像・仏像を中心に、マンダラにあらわされたさまざまな神々を紹介いたします。つまり、「マンダラとはなにか」という問いに答えるのが、この展覧会なのです。以下、主なテーマについて、図録の解説を引用しながら、簡単にご案内しましょう。

シヴァ像

マンダラの仏たち

仏教の開祖ゴーダマ・ブッダは、彼の死後約四百年のあいだは人間の姿に表現されませんでした。法輪、足、仏塔などが、ブッダのシンボルとして描かれるのみだったのです。やがて、紀元一世紀ごろには仏は僧侶の姿によってあらわされ、七世紀ごろには冠をつけ、天衣を着たきらびやかな仏のイメージが出来上がります。そして、女神を抱いた仏も登場します。

このようにマンダラは、仏や女神たちが人の姿で表現されるようになった時代以降のものです。言い換えれば、マンダラの仏や女神たちは、マンダラがつくられる以前の時代に比べて、より一層人間に近づいたものになってきたといえましょう。

ヨーギニー像

マンダラとは何か

「マンダラ」という語をチベット人たちは「中心をまわるもの」と訳しました。マンダラはその中心の仏とそれをとりまく周縁の神々によって成り立っています。それら中心と周縁の仏や神々は、宮殿のなかに整然と並んでいます。

後世、その宮殿は世界の中心であるスメール山

宝マンダラ

チャクラサンヴァラ図

（須弥山）の頂上に建てられていると考えられました。その須弥山の下には、地・水・火・風の元素が積み重なって、世界の物質的基礎をつくっています。つまり、マンダラは、「仏」と「仏たちの住む場所」とのふたつが合わさったものなのです。

マンダラの構造

一方、マンダラは、仏や神々の入った「容器」ともいえましょう、この容器は、さまざまなレベルであらわされます。例えば、仏塔や仏の身体、さらにはわれわれの身体も立体的なマンダラであると考えることも出来ます。

例えば、カトマンドゥの街角には無数の仏塔が建てられています。それぞれの仏塔の四つの側面には、阿閦（あしゅく）、宝生（ほうしょう）、阿弥陀（あみだ）、不空成就（ふくうじょうじゅ）の四人の仏の像が彫られています。つまり、仏塔そのものがひとつのマンダラなのです。ときには、仏塔の頭の部分に眼や鼻が描かれています。これは仏塔が瞑想する仏であることをあらわしているのです。瞑想する修行者の身体もまた、ひとつのマンダラと考えることができます。

ヴァジュラ・ヴァーラーヒー図

マンダラの儀礼

マンダラは仏たちの住む宮殿です。その宮殿はその下にある諸元素とともに、われわれの住む世界でもあります。そして、世界としてのマンダラは、われわれの身体でもあります。

世界であり身体でもあるマンダラ、密教の伝統は、そのようなマンダラを修業者のひとりひとりが眼前にみることのできるようにマンダラ図として描いてきました。そのマンダラ図を前にして儀礼を行い、われわれは仏たちの宮殿のなかに入ります。同時にわれわれの身体が仏たちの容器であることを確かめるのです。

主な出品資料

以上のようなテーマにそって、インド・チベット・ネパール・ブータン・日本等のマンダラや仏像・神像など、約百九十点（国立民族学博物館ほか所蔵）が展示されます。

主な神像・仏像・絵画資料としては、大日如来像・チャクラサンヴァラ図・金剛バイラヴァ図・ターラー図・ヨーギニー像・マハーカーラ図・ヴァジュラバイラヴァ像・ツォクシン図・金剛界マンダラ図・法界自在マンダラ図などが紹介されます。いずれも国立民族学博物館が現地で収集したものを中心とした、貴重な文化財といえましょう。

なお、併設して、石川・富山を中心に、北陸に残る曼荼羅の名品も数多く紹介します。これらの展示品をご覧いただきながら、マンダラの魅力や現代的な意義について、思いをはせていただければ幸いです。

※写真掲載資料はすべて国立民族学博物館所蔵

大日如来像

文殊菩薩像

併設企画展
北陸の曼荼羅

七月十四日（土）～九月二日（日）　第二特別展示室

曼荼羅は、サンスクリットやパーリ語の「mandala」の音訳で、「本質（心髄）を得る」との意味があり、「円輪具足」とも訳されます。

その形態や用途などから密教では、諸仏諸尊を一定の経軌に従って体系的に配列し表した「大曼荼羅」、諸尊の象徴物（シンボル）・器物によって表した「三昧耶曼荼羅」、尊像を表す梵字（種子）を一字づつ連ね配列したり、金剛杵中に尊像を描いた「法曼荼羅」、尊像を壇上に立体的に表したり、諸尊が供養しあう行動を示す「羯磨曼荼羅」の四種に大別され、これを「四種曼荼羅」といいます。

また、内容から密教系では、まず、金剛頂経に基づく金剛界曼荼羅と大日経による胎蔵界曼荼羅との対になる「両界曼荼羅」があります。両部曼荼羅ともいい、密教の根本尊である大日如来を中心に、多くの諸尊を一定の秩序に基づき配置したもので、密教の世界観を象徴的に表しています。次が「別尊曼荼羅」です。大日如来以外の尊像が中心になった曼荼羅で、特定の目的のための修法の本尊として用いられるものです。

星曼荼羅

密教以外では、観無量寿経などの経典が説く阿弥陀浄土の世界を表した「浄土曼荼羅」、また、神社の祭神を本地仏や垂迹神で曼荼羅風に表した「垂迹曼荼羅」、あるいは神社の境内を俯瞰的に表し、本地仏や垂迹神を描かない「宮曼荼羅」、日蓮が体得した法華経の世界を表した「十界曼荼羅」、これには諸尊名を墨書した曼荼羅本尊と諸尊像を絵画で表した絵曼荼羅があります。

このように曼荼羅といっても、非常に多岐にわたりますが、本展は、夏季特別展の併設企画展として、北陸を視野に、神秘的でもあり、また不思議な魅力をもつ曼荼羅の種々相を紹介し、その多彩な内容の理解を深めることを目的に開催するものです。

〔主な出品資料〕

立山曼荼羅　大仙坊A本（レプリカ）〔富山県立山博物館〕
金沢市指定文化財 南天鉄塔図〔金沢市　平岡野神社〕
両界曼荼羅〔羽咋市　正覚院〕
金胎渾頂三昧耶形敷曼荼羅〔羽咋市　正覚院〕
星曼荼羅〔当館〕
白山曼荼羅〔当館〕

主な刊行物のご案内

	（税込定価）
石川県立歴史博物館展示案内	一，〇〇〇円
石川県立歴史博物館蔵品目録	一，八〇〇円
加賀百万石への道　―戦国から太平へ―	二〇〇円
昭和ワンダーランド　―モノでたどる戦後―	一，〇〇〇円
石川のお宝史　―名宝から文化財へ―	三〇〇円
弥生ムラの風景　―越のクニ生み・境界・交流―	一，二〇〇円
御用絵師梅田九栄と俳諧　―芭蕉の教えを守った男―	三〇〇円
肖像画にみる加賀藩の人々	一，四〇〇円
KOSODE 百・華・繚・乱　―丸紅所蔵衣裳名品展―	五〇〇円
春日懐紙	五〇〇円
本願寺展	二，三〇〇円
トキ舞う空へ　―鳥と人の文化史―	一，〇〇〇円
徳川将軍家と加賀藩　―姫君たちの輝き―	一，〇〇〇円
くらし&娯楽の大博覧会　―昭和ヒストリー1926～1989―	九〇〇円
染の華　織の心　―加賀・能登の技とデザイン―	八〇〇円
れきはく所蔵の指定文化財　最新刊！	一，〇〇〇円

※総合カウンターで販売中。定価はすべて税込。郵送ご希望の方は、当館へ直接お問い合わせいただくか、当館ホームページ「刊行物案内（図録等）」をご覧下さい。（電話〇七六―二六二―三二三六）

催事日録

春季特別展「れきはく特選資料展－収蔵庫からお宝登場－」

四十四日間に渡った今回の春季特別展では、開館以来収蔵してきた十七万点余りの資料のうち、普段は一堂に見ることのできない数多くの貴重な指定文化財、いわゆる「お宝」を、リニューアルを前に堪能していただきました。

また、特別展の開催にあわせて展覧会解説三回、収蔵庫ツアー二回、建物紹介ツアー四回を開催しました。今回は参加のしやすさを考慮し、平日と休日それぞれにおこなった結果、毎回多くの方に参加していただくことができ、大変好評でした。

春季特別展関連イベント「収蔵庫＆建物紹介ツアー」

収蔵庫ツアーでは、古文書室や薄暗くちょっと怖い（？）館内収蔵庫、温湿度を厳重に管理した特別収蔵庫など、歴史博物館の心臓部とも言える箇所を見ていただきました。

建物紹介ツアーは二つのコースを設定し、一つは、普段は外側からしか見ることのできない旧陸軍金沢偕行社と旧陸軍第九師団司令部庁舎の内部見学で、建物の保存の必要性を強く感じさせられました。もう一つは、歴博の赤レンガ建物（旧陸軍兵器支廠兵器庫）等の紹介で、特に第二棟と第三棟の建築デザインの大きな違いを、真剣に見比べて探されている様子が印象的でした。

石川の歴史遺産セミナー「近世初期の前田家と能登」

六月二十四日開催のセミナーでは、県内外から講師三名をお迎えし、戦国時代末期から江戸時代初期にかけての前田政権の展開を、能登鹿島半郡の視点から検証しました。今回のセミナー参加申し込みは開始から数日のうちに定員に達してしまい、キャンセル待ちになってしまった方やお断りすることになってしまった方には大変申し訳ありませんでした。講師の方々の興味深いお話に、参加された皆さんは出席できなかった方の分まで熱心に、聴き入ってくださっているようでした。

春の歴史散歩「新緑の卯辰山寺院群」

五月十四日、金沢三寺院群の一つを巡る歴史散歩に二十六名の方が参加されました。見どころいっぱいのエリアですが、今回は玄門寺、来教寺、西養寺、慈雲寺でご住職から丁寧なご説明をいただき、貴重な仏像等も見学させていただき感謝申し上げます。境内だけの見学になった蓮昌寺もありましたが、あっという間に時間が過ぎ、終了予定時間をオーバーしてしまうものになりました。入り組んだ迷路のような小路が続き、四季折々に変化に富む散策も楽しめる、魅力あふれる卯辰山寺院群は、やはり歴史散歩に絶好の地でした。

行事日程（7～9月）

月日	行事	内容
7/21（土）	れきはくゼミナール	「涅槃図」考（学芸主幹　北春千代）
8/3（金）	常設展示ワンポイント解説	古墳に葬られた豪族たち（学芸主任　三浦俊明）
8/18（土）	れきはくゼミナール	「軍都」金沢と遊廓（学芸課長　本康宏史）
9/7（金）	常設展示ワンポイント解説	日本硬質陶器について（学芸主幹　本谷文雄）
9/15（土）	れきはくゼミナール	埴輪群像を読みとく（学芸主任　三浦俊明）

◎開講時間…午後2時～
◎会　場…常設展示ワンポイント解説…各関係展示室
　　れきはくゼミナール…学習ホール
◎受　講　料…常設展示ワンポイント解説…展示室内行事につき、入館料が必要
　　れきはくゼミナール…無料
◎申し込み…不要　※当日受付へお申し出下さい。

れきはくゼミナール

常設展示ワンポイント解説

お知らせ

常設展示室　近世・近代の科学技術

リニューアル準備のため、九月十二日から第三棟が閉鎖されます。

これに伴う代替えとして、第三棟の「科学技術」展示を第二棟第四展示室の一部で紹介します。ご迷惑をお掛けしますが、引き続き、加賀藩から石川県にいたる科学技術の成果をお楽しみください。

れきはく トリヴィア

加賀藩の大名行列

第一展示室の「加賀藩の大名行列」コーナーは、教科書などでお馴染みの「加賀藩大名行列図屏風」のパネルの下に、小さな大名行列人形が並び、子供たちに人気のコーナーとなっています。さて、この屏風と人形には浅からぬ縁があることをご存じでしょうか？

「加賀藩大名行列図屏風」は、金沢の絵師・巌如春（一八六八～一九四〇）の代表作と言われます。しかし実際は如春一人ではなく、加賀藩の大名行列図を多く描いた四井芦雪（または芦雪・一八五五～一九二〇）ら他の絵師と共同で、大正時代から昭和初期にかけて描かれたものです。

巌如春は竪町に住み、町絵師として芝居小屋・映画館の絵看板から掛軸・屏風・襖絵、各種の刷物、挿絵、そして祭礼の行燈絵まで、多岐に渡る仕事を引き受けていました。そして明治四十年代以降は、庶民の生活風俗を中心に郷土史関連の書籍の挿絵などを手掛けています。如春は、近代の石川を代表する郷土史家・和田文次郎（一八六五～一九三〇）が中心となって設立した加越能史談会の活動にも深く関わっていました。郷土史研究を熱心に行い、とても博識だったと言われます。如春の風俗画はその研究成果を存分に生かした緻密なもので、「加賀藩大名行列図屏風」の制作にあたっても、直接士族の家に行き、行列の人数や装束などについて詳細に聞き取り調査をしたと伝わっています。

さて「加賀藩大名行列図屏風」の人物が、動きも顔も整然と描かれ、やや硬い印象を与えるのに対し、大名行列人形は何とも味のある表情をしています。人物三七九人、馬十三頭、合わせて三九二体の人形は高さが約六㎝と小さいものですが、全て手作りで、木彫に彩色が施されています。顔立ちだけではなく、物の持ち方や体の動きまで一体一体微妙に違っており、とても生き生きとして見えます。

作者は堀内祥雲（または祥運・一八九〇～一九四五）で、獅子頭などを得意とした金沢の彫刻師です。この人形は昭和十一（一九三六）年に制作され、祥雲の死後、昭和四十七（一九七二）年に当時の石川県立郷土資料館に寄贈されました。

祥雲は加賀藩の大名行列人形を制作するにあたり、装束や持ち物の色・形などの細部まで忠実に再現するため、苦心を重ねたと言われます。そしてその際に指導を受けたのが、大名行列の研究に通じた巌如春でした。如春から、屏風制作の際に参考にした資料の提供も受けたと考えられています。可愛らしい大名行列人形は、郷土の彫刻師による素晴らしい作品であるだけではなく、研究・考証を下地として作られた貴重な資料なのです。

※トリヴィア＝雑学的な事柄や知識、豆知識

展示替え等による休館日（7～9月）

7月12日（木）～13日（金）
9月3日（月）～4日（火）
※8月の休館日はありません。

本多の森から

いよいよリニューアルのための長期休館まで、カウントダウンが始まりました。夏季特別展「マンダラーチベット・ネパールの仏たち」は、休館前の最後の特別展になります。

リニューアル後の博物館に期待する声が寄せられる一方、現在の常設展示が見られなくなるのは残念だ、とのご意見もあります。私たち学芸員も、愛着のある常設展示を変えてしまう寂しさを感じています。だからこそ、第三棟を閉鎖する九月までに、また全館休館に入る三月までに、より多くの方に現在の常設展示を見ていただき、その目に焼き付けていただければと思います。

広告

金融から見た地域の歴史を展示
金沢金融歴史資料館
（北陸銀行金沢支店内／平日9時～15時・入場無料）
明治10年8月26日 加賀藩 前田家の出資により創業
www.hokugin.co.jp　北陸銀行